

空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味と機能について  
—垂直方向の位置関係を表す動詞の場合—

The Meanings and Functions of Aspect and Tense Forms of the Space Occupying Verbs :  
In the Case of Verbs Expressing Vertical Positional Relationship

呉 揚

WU, Yang

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第44号 2017年11月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.44 2017

## 空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味と機能について ——垂直方向の位置関係を表す動詞の場合——

呉 揚

### 1 はじめに

金田一(1950)の第四種動詞である「そびえる」については、従来ないとされていたスル形式の使用があることが影山(2012)で指摘されている。呉(2015)(以下、「前稿」と呼ぶ)でも、「そびえる」のアスペクト・テンス形式の選択と意味・機能の実現がテキストタイプと相関することを明らかにしている。この現象は、「そびえる」に限らず、空間的配置動詞に広く見られると考えられるが<sup>注1</sup>、その範囲がどこまでなのか、また、動詞のタイプによってどのような実態の違いがあるのか、といったことについては、まだ明らかになっていない。

そこで、本稿では、「そびえる」と同じように、垂直方向の位置関係を表す空間的配置動詞のグループに範囲を広げて考察することにする。具体的には、まず、このグループの動詞を主体の特徴によって大きく2つに分け、それぞれの下位グループについて、それらのアスペクト・テンス形式の意味・機能とテキストタイプとの相関に関する分析を前稿と同じ基準で行い、その結果を前稿の結果と比較する。それによって、上記の課題に対する最初のアプローチとしたい。

### 2 語彙的な特徴

垂直方向の位置関係を表す空間的配置動詞の語彙は、先行研究(工藤1995など)や国立国語研究所編(2004)『分類語彙表 増補改訂版』(大日本図書)を参考にして収集した。『分類語彙表 増補改訂版』での語彙の収集については、「そびえる」と「立つ」を代表に選定し、それぞれが配置されている項目における類義語に対して、コーパスで用例検索を行い、空間的な配置を表すことのできるものを取り出した<sup>注2</sup>。今回の調査範囲では、「そびえる」以外に、以下のようなものが見られた。

「そびえ立つ」「そそり立つ」「そばだつ」「屹立する」「聳立する」「切り立つ」「直立する」「突っ立つ」  
「立つ」<sup>注3</sup>「並び立つ」「林立する」「乱立する」

<sup>注1</sup> 例えば、筆者の調査によると、「隣接する」「面する」などの空間的配置動詞のスル形式は、「そびえる」と同様に、フィクションの小説にほとんど見られないが、ノンフィクションの新聞記事に多く現れる。

<sup>注2</sup> 『分類語彙表 増補改訂版』には、「そびえる」は「2用の類—2.1抽象的關係—2.15作用—2.1513固定・傾き・転倒など」に、「立つ」は「2用の類—2.1抽象的關係—2.12存在—2.1220成立」と「2用の類—2.3精神および行為—2.33生活—2.3391立ち居」に配置されている。

これらを語構成の観点から見ると、単純語は「立つ」のみで、他はすべて「立つ」を含む派生語または「立」を含む漢語である。このうち、「並び立つ」「林立する」「乱立する」は、複数主体の空間的配置関係を表し、個々の主体は垂直方向の向きをもつが、主体どうしはむしろ水平に広がっていて、単純ではない。よって、ここではこれらは対象外とする。

まず、今回対象とする空間的配置動詞を述語とする文において何が主体となっているかを、小説の終止用法の用例によって調査したところ、表1のような結果になった<sup>注4</sup>。

表1 垂直方向の位置関係を表す空間的配置動詞の主体の意味的なタイプ（用例数/％）

	自然物		人工物	
	天地 (山、崖、岩など)	植物 (木、草、花など)	建造物 (家、塔、城など)	標識、機械 (看板、旗など)
そびえ立つ	22 (15.6%)	8 (5.7%)	102 (72.3%)	9 (6.4%)
そそり立つ	44 (47.3%)	7 (7.5%)	36 (38.7%)	6 (6.5%)
屹立する	2 (16.7%)	0	10 (83.3%)	0
切り立つ	2 (50%)	1 (25%)	1 (25%)	0
直立する	0	0	1 (16.7%)	5 (83.3%)
突っ立つ	3 (12%)	3 (12%)	8 (32%)	11 (44%)
立つ	10 (4.5%)	42 (19.2%)	144 (65.8%)	23 (10.5%)

「そびえ立つ」「そそり立つ」「屹立する」「切り立つ」は、山、岩のような自然物と、家、塔のような建造物、すなわち巨大で、ひときわ高く、堂々としているものを主体とすることが多く、「そびえる」と共通する（例1～5）。これらは「そびえる」の類義語である。これに対して、「直立する」「突っ立つ」の主体には、人工物の標識、機械と建造物（例6～7）、「立つ」は建造物と木、花のような植物が多い（例8）。

- 1) すぐ正面に榛名山が青い空に大きく聳え立っていた。（絢爛たる流離）
- 2) ただ、黒ぐると、巨石が闇のなかにそそりたっているだけだ。（闇の守り人）

注3 「立つ」は変化動詞であり、「隣家との境界に塀が立った」のように、物体が横から縦の状態になることを表すが、空間的な配置を表すには、時間的な側面の捨象が起こる。また、動詞「建つ」は「駅前に新しいビルが建つ/建った」のように、建造物が新しく作られたことを表し、「立つ」とは別語である。ただし、「駅前には大通りに面して巨大なビルが建っている」のように、空間的な存在を表すこともある。だが、「建つ」は「存在している」ことに焦点を当てており、「立つ」のように垂直方向の位置関係を表しているとは限らないため、本稿の考察対象外とする。

注4 小説には「そばだつ」「聳立する」の終止用法がなかったため、表1で示していない。ただし、「谷を囲んでそばだつ岩壁の険しさは、彼らの絶望に止めを刺すものであった。」（恐怖の骨格）「黒部溪谷をはさんで聳立する剣岳の山塊をはじめとして、どの方角にカメラを向けても、息をのむ大景観が展げている。」（日本アルプス殺人事件）のような連体用法があり、主体は「岩壁」「山」のような自然物が多く、主体の意味的なタイプの特徴は「そそり立つ」「屹立する」などと共通するといえる。

- 3) 深い谷あいを利用川の深緑色の流れが蛇行し、澄み切った冬空に、遠く三国連峰の雪を頂いた尾根が屹立している。(レクイエム)
- 4) 大崩海岸屏風ガ浦は、その名のとおり屏風のような海蝕崖が海面から八十メートルの高さに切り立っている。(日蝕の断層)
- 5) 町を横切る立谷川を挟んで、宿の向こう側に山寺は聳えている。(広重殺人事件)
- 6) 納屋から屋根裏に、作りつけた梯子が直立している。(ひつじが丘 泥流地帯)
- 7) 卓子の上には栓を抜かれたビール壺と、空のグラスが突っ立っていた。(赤目四十八瀧心中未遂)
- 8) 南メキシコの片田舎に、世界で一番古いだらうと言われる老木が立っている。(艸木虫魚)

「そびえ立つ」「そそり立つ」「屹立する」「切り立つ」の主体には、例9のように、植物や機械のようなものがあるとしても、それらは巨大で、またはひときわ高いものに限られるだろう。一方、「直立する」「突っ立つ」「立つ」については、その主体は山、崖のような、高さのあるものであっても、必ずしもその巨大さや堂々としているさまには注目していないといえよう。

- 9) 車の前には、同じように急停車した大型トラックのたくましい車体がそびえ立っていた。(熊)
- 10) 近々と、谷を隔てて、端山の林や、崖の幾重も重った上に、二上の男岳の頂が、赤い日に染って立っている。(死者の書)

つまり、「そびえ立つ」「そそり立つ」「屹立する」「切り立つ」の語彙的な意味には、巨大でひときわ高く、堂々としているといった量的な側面に関わる意味が含まれているが、「直立する」「突っ立つ」「立つ」は、普通は、主体の大きさ、高さに関する量的な特徴は関わらない。このように、同じく垂直方向の位置関係を表す空間的配置動詞でも、語彙的な意味の細部に違いが見られる。このことは、これらの動詞のアスペクト・テンス形式に関する特徴にも関係していると考えられる。以下、「そびえ立つ」「そそり立つ」「屹立する」「切り立つ」を「そびえ立つ」類、「直立する」「突っ立つ」「立つ」を「立つ」類として、それぞれのグループの動詞のアスペクト・テンス形式について考察していく。

- 3 テキストにおける垂直方向の位置関係を表す空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の分布  
すでに触れたように、空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の現れ方はテキストタイプと相関する。本稿では、テキストタイプについては、前稿における「そびえる」に対する調査と同じように、ノンフィクションである新聞記事<sup>注5</sup>とフィクションである小説を対象とする。また、ノンフィ

<sup>注5</sup> 朝日新聞記事データベース（朝日新聞社）1984年1月1日～2013年10月30日の記事を検索範囲とした。

クシヨンのテキストに関しては、非体験的なものである地誌論述文と、体験的なものである紀行文・ルポルタージュに分ける。前者は、資料・記録による地域・地方の自然や文化に関する事実を論述する新聞記事であり、後者は、書き手（記者など）が旅で体験したこと、或いは自ら現地へ赴いて取材した内容を記したものである。また、フィクションのテキストは、時間の流れの中にある個別・具体的な出来事を描く小説の外的出来事提示部分と、背景的な情報の説明を行う小説の解説部分に区別する。なお、紀行文・ルポルタージュ、小説の外的出来事提示部は、具体的な出来事を描くアクチュアルなテキストであり、地誌論述文、小説の解説部分は、一般的な事実を説明する非アクチュアルなテキストである。

この4つのタイプのテキストにおいて、それぞれの語彙に対して実例を検索して調査した。終止用法における「そびえ立つ」類と「立つ」類のアスペクト・テンス形式の用いられ方は、表2のようになる<sup>注6</sup>。

表2 アスペクト・テンス形式のテキストタイプごとの分布（用例数/%）

		ノンフィクション		フィクション	
		地誌論述文 (非体験的)	紀行文・ルポルタージュ (体験的)	解説部分	外的出来事 提示部分
そびえ立つ類	完成相 (スル)	342 (75%)	194 (52.2%)	2 (5.3%)	8 (3.3%)
	継続相	102 (25%)	178 (47.8%)	36 (94.7%)	232 (96.7%)
立つ類	完成相 (スル)	399 (63.3%)	43 (23.9%)	4 (5.7%)	1 (0.6%)
	継続相	203 (36.7%)	137 (74.1%)	66 (94.3%)	176 (99.4%)

まず、「そびえ立つ」類と「立つ」類の両方についていえるのは、いずれにも完成相シタ形式がないことである<sup>注7</sup>。また、継続相はいずれのテキストにもよく現れるが、完成相の現れ方は、ノ

<sup>注6</sup> 小説の会話文と新聞記事の会話文の用例も少し見られたが（14例）、今回は検討の対象外とする。たとえば、次のようなものがある。「そりゃ僕だって、高炉は一日も早く完成させたいですよ、今、ちょうど炉体が出来上がったところですが、この山門のように高く聳えたっているんですよ」（華麗なる一族）、「二十一世紀が未来だった頃の太陽の塔は、力強くそびえ立っていた。こんなに寂しげではなかった」（朝日新聞2002/12/25）

<sup>注7</sup> 「茨城県ひたちなか市にこのほど、白い塔がそびえ立った。」（朝日新聞2010/5/11）、「こう話し話し、三吉は正太と並んで、青物市場などのあたりから、浜町河岸の方へ歩いて行った。対岸には大きな煙突が立った。」（家）のようなシタ形式用例もあるが、これらは、「塔ができた」「煙突が現れた」に相当し、出現動詞の用法であるため、対象としない。

ノンフィクションとフィクションで明らかな違いがあり、フィクションには非常に少ない<sup>注8</sup>。非体験的なノンフィクションのテキスト（地誌論述文）は完成相の使用が中心である。

一方、「そびえ立つ」類と「立つ」類の違いは、体験的なノンフィクションのテキスト（紀行文・ルポルタージュ）では、前者は完成相と継続相の使用率がほぼ同様であるが、後者は継続相の使用が中心である点である。「そびえ立つ」類に関する調査結果は、前稿における「そびえる」に対する調査結果とほぼ一致する。

以下、テキストのタイプごとに、「そびえ立つ」類と「立つ」類に分けて、これら空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味と機能について、実例に基づいて観察する。

## 4 「そびえ立つ」類のアスペクト・テンス形式の意味・機能

### 4.1 非体験的なノンフィクションのテキスト—地誌論述文—

地誌論述文においては、「そびえ立つ」類の空間的配置動詞にはスル形式、シテイル形式、シテイタ形式が見られ、スル形式が中心である。スル形式から見ていく。

#### (1) スル形式

前稿では、地誌論述文において、空間的配置動詞「そびえる」の完成相スル形式は、基本的に存在動詞「ある」が恒常的な存在を表すのと似ており、存在動詞化されていると指摘した。このことは、「そびえ立つ」類の空間的配置動詞と共通している。

これらの空間的配置動詞のスル形式を述語にする文には、場所が主題になるタイプ（例11）、主体が主題になるタイプ（例12）、場所も主体も主題化されず、冒頭の文全体が主題となって、第2文につながっていくという構成になるタイプ（例13）と、場所格名詞と主格名詞のいずれかが欠けており、前後の文脈に場所あるいは主体が存在し、それが主題となっているタイプ（例14）、という4つの構造的なタイプがある。これは存在動詞「ある」と変わらない。

- 11) 04年に、安藤忠雄さんの設計も話題になった地中美術館が開館。人口3500人弱の島を昨年延べ約19万人が訪れた。美術館や屋外作品が集まる自然豊かな島南部は「アートの楽園」の様相だ。一方、車で15分ほどの島北部には、巨大な精錬所がそそり立つ。隣の豊島に不法投棄さ

注8 呉（2015）では「そびえる」は小説にスル形式がないと指摘しているが、調査範囲を広げて調査してみると、「海上保安庁水路部の建てものは、築地に近い東京湾の入口にあった。隣りには朝日新聞社の本社屋がそびえる」（帝都物語）のようなスル形式の用例が2例見られ、「そびえ立つ」類と同様である。といっても、これは空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の選択がテキストタイプと相関するという主張の妥当性を否定することにならない。

なお、「丸髻や紋付は東京から墓参に來たのだ。寂しい墓場にも人声がする。線香の煙が上る。沈丁花や赤椿が、竹筒に挿される。新しい卒塔婆が立つ。」（みみずのたはこと）のような、スル形式の出現動詞の用法は対象外としている。

れた産業廃棄物の処理施設もある。(朝日新聞2007/2/24)

- 12) ハリギリは、墓地の石段の横にそびえ立つ。幹回り4メートル、高さ25メートルという堂々たる枝ぶり。専門家は樹齢1000年ぐらいと診断したそうだ。1961年には都天然記念物に指定された。(朝日新聞1992/7/1)
- 13) 兵庫県淡路島北東部の海岸沿いに、高さ100メートル(台座部分が20メートル)の「世界平和大観音像」がそびえたつ。1982年、島出身の不動産業者が建立した。美術館やレストラン、ホテルも併設。当初は観光バスが列をなし、1日数千人が訪れたという。(朝日新聞2010/2/12)
- 14) ハワイ・ホノルルから東へ約25キロのモロカイ島に、ハンセン病患者の隔離収容施設跡がある。約100年間に約8千人が送り込まれ、大半が島で一生を終えた。その中に、日本からハワイに移住し、ハンセン病を発病した日系人が相当数いた。いま敷地内に住む元患者40人のうち、日系人は3人。この島に住んで、間もなく60年になる。三方を海で囲まれ、高さ500メートルの絶壁が切り立つ。島の北側に孤立した半島・カラウパパに、隔離収容施設の跡が残る。(朝日新聞2003/2/7)

## (2) シテイル形式

地誌論述文においては、「そびえ立つ」類の継続相シテイル形式が完成相スル形式より少ないが、使用上、「恒常性」を表すところで両者はほぼ違いがない。シテイル形式には、下記の用例のように、スル形式に見られる4つの構造的なタイプが見られる。例11～14のスル形はシテイル形式に、例15～18のシテイル形式はスル形式に置き換えてもいいだろう。前稿では、「そびえる」に対しても同じことを指摘した。

- 15) 竜神峡と斜め向かい、東側の山が<東金砂山> (139) だ。モミ、コナラなどの落葉樹とスギ、ヒノキなどの常緑樹が混生する。植生面で温帯林と暖帯林の分岐点にあたり、学術的にも貴重な森林という。山頂付近には東金砂神社があり、樹齢100-400年の大木がそそり立っている。(朝日新聞1988/9/25)
- 16) 姥杉は、標高約450メートルの和賀仙人峠の国有林内にそびえ立っている。樹齢900年、高さ29・5メートル、幹周11・5メートルで、林野庁の「巨木百選」に選ばれた。樹勢の衰えが目立ち、滝沢村の独立行政法人・林木育種センター東北育種場が後継木づくりのため、小枝を採取し、クローン苗木を育てている。(朝日新聞2005/6/30)
- 17) 埼玉県川口市の鋳物工場の跡地に、五十五階建ての超高層マンションがそびえ立っている。大京が販売した「エルザタワー」。六百五十戸はすでに完売しており、八月に入居が始まる。(朝日新聞1998/6/11)

18) 公園は広さ約0・5ヘクタールで、JR山陰線夜久野駅の南約1・5キロの兵庫県境付近にある。火山噴火の溶岩が冷えて固まった台地の一角で、冷える際に出来た玄武岩の柱状節理・板状節理が見られる。高さ15メートルの柱状節理が幅150メートルにわたり、びょうぶのように切り立っている。(朝日新聞2013/12/19)

ところで、前稿でも指摘したように、地誌論述文では、「そびえる」のスル形式とシテイル形式は基本的に置き換えることができるのであるが、「天に向けて」のような後置詞句、または「海から」のような補語を伴い、垂直方向の位置関係を表す場合は、スル形式よりもシテイル形式のほうが自然である。このような用例は「そびえ立つ」類にもあるが、今回は、垂直方向の位置関係を表すスル形式も見つかった(例20)。ただし、地誌論述文ではこのような用例が非常に少なく、下記の2例しかない。

19) 天に向けて、打ち上げロケットのようにそびえ立っている。双輪とうは、輪王寺・三仏堂のそばにある。鋳銅製で高さ約十三メートルもある。将軍家光の発願により、日光山の中興の祖・天海大僧正が建造した。天台宗の宗祖最澄は、鎮護国家のため、全国の東西南北中総の六カ所に双輪とうを建立したといわれている。天海がそれに擬して建てたという。(朝日新聞1995/10/27)

20) ミルフォードサウンドは、深く切れ込んだフィヨルドで有名。1000メートル級の断がいが海から垂直にそそり立つ。日本人観光客が必ず立ち寄る景勝地。遊覧飛行は全体の旅行料金には含まれておらず、旅行者が希望に応じて現地を選べる。(朝日新聞1989/12/31)

### (3) シテイタ形式

地誌論述文においては、継続相過去形シテイタ形式もしばしば見られる。地誌論述文は発話行為の場へのアクチュアルな関係づけがあることから、シテイタ形式にダイクティックな過去の意味が実現する。つまり、下記の用例のように、「かつては」のような時間副詞と共に起して、「過去の長期的存在」が表される。

21) しかし、現在のシンガポールでは、この管制塔並みの高木を見ることはできない。マレー語の“Chengai”が、なまって名付けられた木は、建築材料として古くから使われていた。小さな黄白色の花をつける。その中でも高さ五十メートルの高木が、島の東北部のジャングルの中に一本そびえ立っていた。一九二七年には航海標識として海図に載るまでになった。(朝日新聞1996/12/2)

22) JR秋田駅から西にまっすぐに延びる大通りは広小路と呼ばれる。かつては県下一の商店街



で、地元百貨店「木内」はその中心的な存在だった。3階建ての屋上には展望棟と、観覧車や電車の乗り物。そして広告塔が街を見下ろすようにそびえ立っていた。その木内が92年春、百貨店の看板を下ろした。(朝日新聞2007/2/15)

#### 4.2 体験的ノンフィクションのテキスト—紀行文・ルポルタージュ—

「そびえ立つ」類の空間的配置動詞は、体験的ノンフィクションのテキストである紀行文・ルポルタージュにも、スル、シテイル、シテイタの三つの形式が見られる。もっとも多く見られるシテイタ形式から見ていこう。

##### (1) シテイタ形式

ノンフィクションのテキストである紀行文・ルポルタージュも発話行為の場への関係づけがあるが、このタイプのテキストでは、書き手の体験の範囲の出来事が記録されるため、地誌論述文のシテイタ形式と同じようにダイクティックな過去の意味＝「過去の長期的存在」を表すことはない。過去形は、書き手が記憶の中にある過去の体験を記録する〈体験の確認〉というムード的な用法が中心となる。なお、このテキストでは、文脈には、書き手の評価（二重下線部分）が現れることが多い。

23) 途中、原喜与美さん（57）に会った。大杉の巡視に行くのだという。農協勤めのかたわら、岐阜県から委嘱され、5年前から月2回ほど大杉に異状がないか、見回っている。一緒に向かうことにした。石段を上り切ると、大杉が目の前にそそり立っていた。樹皮がはがれ落ち、よろい姿の古武士のようだ。(朝日新聞2004/9/24)

24) 先日、取材の合間にふと空を見上げると、岩木山が夕日の中で悠然とそびえたっていた。弘前では当たり前前の光景なのかもしれないが、山肌に残る雪と夕日の色合いが美しく、これまでの取材の疲れがいやされるような気がした。(朝日新聞2001/5/19)

次の例25、26のように、場所を表す二格補語ではなく、対象を表す二格補語（「空に」）を伴って垂直方向の位置関係を表す例、そして、「～を背に」を伴い、前景と背景の位置関係を表す例もある。体験的テキストでは、このような空間的な位置関係を表すことが多くなってくる。全部で31例あった。

25) 帰り道、「三条ダルミ」と呼ばれる分岐に立つと、視界が突然開けた。しばし我を忘れ、だれもない空に思わず拍手を送ってしまった。指の先には、くっきりと浮かび上がる霊峰・富士。黒々と、雄々しく、悠然と、南西の空にそびえ立っていた。(朝日新聞1999/10/22)

26) ほんの数週間しか見られないその花をぜひ見たいという友の夢をかなえるため、雨を覚悟の旅でした。幸運にも前日の雨も上がり、曇り空を背に穂高連峰がそびえたっていました。まだ雪が残り、その雪の白と山肌の黒がコントラストをなし、天空から私たちに迫ってくるようでした。(朝日新聞2006/8/27)

## (2) シテイル形式

紀行文・ルポルタージュでは、体験した過去のことを提示するのに、継続相非過去形シテイル形式を使うこともある。ここでは、非過去形は、体験した過去のことを今日の前にあるように描き、「臨場性」という文体的効果のために使用されると考えられる。紀行文・ルポルタージュでは、例23、27、28のように、非過去形と過去形の交替使用が可能である。例27は垂直方向の位置関係を表す例であり、書き手の評価（二重下線部）を伴っている。例28は前景と背景の空間的な位置関係を表す例である。

27) 一夜を過ごしたのは「最北の宿」と名乗る民宿だった。国道を一つ隔てた海岸線に、北緯四五度三一分一四秒を示す三角すいの碑が、青みのあせた空を刺し貫くかのようにそばだっている。北海道の宗谷岬へたどり着いた者に、そこが日本の最北端であることを告げる石のオブジェ。(朝日新聞2008/11/1)

28) 赤く塗り直された北大仏殿が砂の鳴沙山を背にそそり立っている。観光客が記念写真を撮り合っていた。中国人の姿も目立つ。子供のころこの近くに住み、莫高窟内で隠れんぼをしてよく遊んだという敦煌市内に住む女性（31）がいた。(朝日新聞1990/9/5)

また、このテキストのシテイル形式の例には、例23～25のように、「上り切ると」「見上げると」「分岐に立つと」などの書き手の視界を定める動作を表す節と共起し、その視界のなかに存在する情景を描き出すようなものが多い。この場合、継続相形式は、他の出来事との「同時性」というタクシスの意味を表しているといえる。

## (3) スル形式

紀行文・ルポルタージュでは、「そびえ立つ」類に完成相非過去形スル形式も現れる。この非過去形は、シテイル形式と同じく、体験した過去のことを目の前のように描く「臨場性」という文体的効果のために使用されていると思われる。

29) 大工さん12人を含む小屋開け要員22人もヘリで上がった。新緑の山腹をなめるように高度を上げてゆくと、雪溪に囲まれた島のような岩場の基部に小屋の敷地が見え、狭いヘリポートに

降り立った。東方に戸隠山や妙高山を望み、背後は、たっぷり雪を残した岩山がそびえ立つ。温泉の硫黄臭が漂い、鼻をつく。(朝日新聞2007/7/4)

30) 不思議なのが、穴を南北に貫くように整然と並ぶ大谷石の石畳。採石場に続いていた石畳だったのだろう。瞬時に30メートル直下に陥没したため、石の列が乱れずに落下したようだ。側壁を見ると、土砂崩れを起こした北側を除いて、最深30メートルのがけが三方に切り立つ。特に東側は、5メートルほどの茶色の表土の下に、厚さ約6メートルの薄緑の大谷石の層が顔を見せ、その下に横約30メートル、縦7、8メートルの真っ黒い空洞のようなさらに深い穴が開いている。(朝日新聞1989/3/11)

31) ズズーという効果音が鳴り始めると、それまで池で水遊びをしたり、滑り台に夢中になっていた子供たちが、いっせいに集まってきた。ロケットの周りに設置されたさくによじ登り、上を見上げる。高さ51メートルの「H-2型ロケット」が天に向かってそそり立つ。見上げ続けるとアゴが疲れてくる。(朝日新聞1992/8/7)

継続相シテイル形式と同じように「臨場性」を表すのだが、継続相の表す「同時性」のタクシスの意味と違って、完成相スル形式は、書き手の移動に伴う視点の変化による「継起性」のタクシスの意味を表す。つまり、書き手の移動によって突然目に入ってくる景色を時系列に沿って描く時には完成相が用いられているのである。

このように、体験的ノンフィクションのテキストである紀行文・ルポルタージュでは、「そびえ立つ」類の空間的配置動詞の完成相と継続相は、「継起性」「同時性」のタクシスの意味を表し分けられている。これは、前稿における「そびえる」に対する考察結果と一致する。

#### 4.3 フィクションのテキスト—小説の地の文の解説部分—

「そびえ立つ」類の空間的配置動詞は、フィクションのテキストである小説の地の文の解説部分では、基本的に継続相が用いられるが、完成相スル形式も少し出てくる。継続相から見ていく。

##### (1) シテイル形式

小説の地の文の解説部分は、非アクチュアルな背景的説明であるため、これらの空間的配置動詞のシテイル形式は「恒常性」を表す。紀行文・ルポルタージュにおけるシテイル形式のように「臨場感」を表さないのは、非アクチュアルな背景的説明であるため、文体的効果を求める必要がないからである。

32) 本丸と西の丸は大声で呼べば鞍部をへだてて話ができるようなところにある。東西の長さ約二丁半(約三百メートル)である。鞍部の南側には追手門があり、鞍部の北側に降りて行けば

そこに裏門（搦手門）があった。この城は周囲が断崖絶壁で、とうてい攀じ登れるようなところではない。特に北面には礫岩質のほとんど垂直な岩壁がそびえ立っている。この城を攻撃して成功する可能性があるのは西の丸方面である。（武田勝頼）

- 33) 王城は、巨大な岩盤にがっちりとした石垣をくみ、その上にそそりたっている。いくつもの館を回廊でむすび、急勾配の屋根の上には槍のように高い塔がそびえたっていた。王都には、常時〈王の氏族〉であるカンバル氏族の兵士千人と、各氏族から十年交代で兵役についている兵士千人がくらししているが、いま、そのうちの精鋭軍五百人が、王城の城郭の内側に集合していた。（守り人シリーズ02 闇の守り人）

## (2) シテイタ形式

小説の地の文の解説部分においては、過去形シテイタ形式も現れる。フィクションのテキストは発話行為の場への関係づけが存在しないため、ダイクティックな過去が実現しえない。紀行文・ルポルタージュにおけるシテイタ形式のような「体験的確認」の用法も実現しない。小説の地の文の解説部分のシテイタ形式も「恒常性」を表し、シテイル形式と置き換えてもいい。このテキストでは、下記の例のように、文脈上、非過去形と過去形とが交替して現れる現象が多く見られる。

- 34) 紀尾井町は江戸時代、紀伊、尾張、井伊三藩の江戸屋敷があったところから名づけられたゆかりの地で、皇居に隣接する高級住宅地である。紀尾井スカイメゾンはその紀尾井町の中心の高台に、周囲を睥睨するようにそそり立っていた。最高の区分に九千万円の値がつけられて、さすがものに動じない東京っ子をアツと言わせた話題のマンションである。（新幹線殺人事件）
- 35) 皇城の正門承天門は、高い城牆のうえに重層の門楼をのせ、泰山のごとくそびえ立っていた。門そのものがすでに大宮殿である。門前には五つの大門を連ねた牌楼（鳥居形の門）が建ち、その門上には『承天之門』と四文字を刻んだ額をかける。（にわか産婆・漱石）

## (3) スル形式

小説の解説部分においては、完成相非過去形スル形式は2例見られた。これらも、「恒常性」を表し、シテイル形式に変えてもいいようである。

- 36) ケインとフィリエルは、南の森の丘へ来ていた。ハイラグリオンの三つの丘をつなぐ、南側の橋をわたったところだ。橋をわたり終えてすぐ、緑濃い丘には、鋭角のアーチを大から小へつらねた大伽藍がそびえ立つ。これが至高の大聖堂であり、リイズ公爵の葬儀がとりおこなわれたところだった。（西の善き魔女）
- 37) 舞台となる外壁広場とは、トーラス大修道院をぐるりと取り巻く胸壁の内側が、正門のわき

で少し広がり、長方形に高台となっている場所だった。門の反対側には、鐘楼のある礼拝堂がそそり立つ。高台の下は、馬車が数台ゆうに回れるほど広い石だたみがあり、トーラスの全生徒が寄り集まっても、まだたくさん余裕があるほどだった。(西の善き魔女2 秘密の花園)

#### 4.4 フィクションのテキスト—小説の地の文の外的出来事提示部分—

「そびえ立つ」類の空間的配置動詞は、小説の地の文の外的出来事提示部分においても、ほとんどが継続相で現れる。完成相スル形式もあるが、わずかである。

##### (1) シテイル形式

外的出来事提示部分における継続相非過去形は、作中人物の内的視点を捉えている。つまり、この非過去形は作中人物の「知覚体験性」を明示している。紀行文・ルポルタージュと同様に、このテキストでも評価を示す修飾成分を伴う場合が多い。「同時性」のタクシスの意味も成り立っている。

38) 車は沼田から後閑にかけての急坂をゆっくりと登っていく。関東平野の単調な景観は、渋川を過ぎたあたりから一変する。深い谷あいを通る利根川の深緑色の流れが蛇行し、澄み切った冬空に、遠く三国連峰の雪を頂いた尾根が屹立している。曲がりくねったルートのせい、それともレールが老朽化しているからか、車体は右に左に振り子のように揺れる。(レクイエム)

39) ランプの光に気づいて、女が振向いた。女は器用にスコップを使って、石油罐のなかに砂をすくいこんでいた。その向うに、黒い砂の壁が、のしかかるようにそそり立っている。あの上、昼間、虫をさがして歩いた場所だろう。(砂の女)

##### (2) シテイタ形式

上で見た継続相非過去形の例に対して、過去形の例では、作中人物の知覚体験を対象化し、外的視点から捉えなおしている、つまり、外的視点化(工藤1995)が起こる。ここでも、評価を示す修飾成分が多く使用されており、「同時性」のタクシスの意味も成立している。例40には非過去形と過去形が共存しており、それぞれ作中人物(美音子)の知覚体験と作中人物の知覚体験の対象化で区別される。

40) 美音子は最後のカーブを抜け、そして車を停めた。エンジンを切ると、空の高処から聞こえてくる、ゴウゴウという風の唸り音が強く感じられた。フロントガラスのすぐ向こうには、暗雲たなびく夜空を背景として、大きな建物がシルエットとなって黒々と聳え立っている。安城由紀が飛び降りたという、尖塔の影が、天をさして不気味にそそり立っていた。(Jの神話)

41) 喜助は作業場の小舎の軒下まで来て女と別れたが、その頃になって雪がひどくなった。村

へくる一本道は溪谷ぞいにまがりくねっていたが、途中の大杉は針のような雪の梢をみせて空にきりたっていた。黒と白とのまだらになった大杉の下を、黒いケットをかぶった女が小さくなるまで、喜助は見送った。(越前竹人形)

### (3) スル形式

外的出来事提示部分には、わずかながら、スル形式も見られる。スル形式は、作中人物の知覚体験を明示するのに用いられることはシテイル形式と共通であるが、ここでは「継起性」のタクシスの意味になる。

42) 朝食のあとでボートを借り、湖の中ほどまで漕ぎ出した。ボートが進むたびに磐梯山の風景が雄大になる。湖を一望するようにそびえ立つ。岸に戻り、タンデムに乗って湖畔の道を走った。中彦が前、朋子がうしろ……。初めはなかなか呼吸がうまくあわない。(ぬり絵の旅)

43) 白帝城を過ぎると、いよいよ長江三峡の最初の門、瞿塘峡に入った。河幅が狭まり、兩岸にきりたった山が重なり、北岸に赤甲山が刀できりとったような鋭い岩肌で聳えたつ。南岸には白い岩肌を見せた白塩山が控えている。赤甲山は朝陽の中で輝き、中腹のあたりから霧が湧いている。(大地の子)

以上のように、「そびえ立つ」類のアスペクト・テンス形式の用いられ方とテキストにおける意味・機能は、「そびえる」と共通する。次は、「立つ」類のアスペクト・テンス形式について見ていく。

## 5 「立つ」類のアスペクト・テンス形式の意味・機能

### 5.1 非体験的ノンフィクションのテキスト—地誌論述文—

地誌論述文においては、「立つ」類の空間的配置動詞は、「そびえ立つ」類の空間的配置動詞と同様にスル形式が中心である。スル形式とシテイル形式はいずれも「恒常性」を表し、存在動詞化されている。

### (1) スル形式

44) 中央区東平一丁目のガソリンスタンドの正面には「末広大明神」として、イチョウの枯れ木が直立する。四五年三月の大空襲で焼けたが、道路拡幅のため切り倒そうとした人が急死し、たたりを恐れて残されたという。(朝日新聞1996/10/28)

45) 多治見修道院は、土岐川が大きく曲がり込んだ付近の、なだらかな丘陵地に立つ。岐阜県多治見市緑ヶ丘にある。赤い屋根、白い壁。木造の3階には屋根窓が並ぶ。周囲のブドウ畑は今年の収穫が終わったばかりだ。地下室でワインに醸造される。(朝日新聞2012/10/31)

- 46) J R桜ノ宮駅に近い大阪市北区天満橋の大川端に3月、「大阪アメニティパーク (OAP)」がオープンし、城北の新たな人出の核になっている。中心施設は東京外への初進出をうたう帝国ホテル大阪で、ショッピング、レストラン街が併設されている。金属工場跡地5ヘクタールの再開発で、今まで高層建築がなかった一帯に100メートルを超える2棟のビルが直立する。全体が川を正面にした配置をとり、水上バスで中に入ることもできる。(朝日新聞1996/4/11)
- 47) トキワ荘は1982年に取り壊され、隣にあった日本加除出版が約10年前に跡地を買い取った。現在、同社の新館が立つ。今でも「マンガの聖地」を一目見ようと、全国からファンが来訪するが、説明板や痕跡は何もなかったという。(朝日新聞2012/4/7)

## (2) シテイル形式

- 48) 信濃の諏訪大社を勧請した地元の守護神の諏訪神社は、水の神として生活用水や五穀豊穰、中世では戦勝・武運長久の祈願が行われた。境内には市指定天然記念物の枝ぶりが見事なケヤキの巨樹が直立している。(朝日新聞2012/8/3)
- 49) 埼玉県北端の深谷市にある60席のミニシアターの深谷シネマは、江戸時代に創業した造り酒屋の跡地に立っている。区画整理で2年前にそこへ移転するまでは、町中のさびれた商店街で空き店舗になっていた銀行の建物を借り、49席の客席で上映していた(朝日新聞2012/2/4)
- 50) 大阪市淀川区の府立北野高校。敷地の西端に、高さ約13メートル、幅約10メートル、厚さ約70センチ、れんが造りの巨大な「壁」が直立している。上部を中心に二十数カ所の欠けたような跡が見て取れる。隣接して「殉難乃碑」と刻まれた碑がある。(朝日新聞2007/8/14)
- 51) 縄張りは山頂に主曲輪、その周囲下方には帯曲輪が巡り、主曲輪の北東と西南斜面には石塁を用いた段曲輪を配置している。現在、主曲輪には根古屋神社上社の石祠がまつられ、北東辺に土塁、東辺と東南隅には土塁の痕跡がある。また、武田氏の烽火網の中核拠点として、模擬の烽火台が立っている。(朝日新聞2011/4/22)

ところが、今回の調査範囲では、地誌論述文において「立つ」類の空間的配置動詞が、垂直方向の位置関係を表すのに使用された例が見られなかった。すなわち、「立つ」類の空間的配置動詞は、「そびえ立つ」類と比べて、存在動詞化が一層進んでいるようである。

## (3) シテイタ形式

シテイタ形式は、「そびえ立つ」類と同様に、ダイクティックな過去の意味である「過去の長期的存在」を表す。

- 52) 豊前市三毛門と吉富町直江界木の境界に幅2メートルほどの小川が流れている。川の名前は

御界川。江戸時代は、この川が中津、小倉両藩の境界だった。川の東側（吉富町）が中津藩、西側（豊前市）が小倉藩で、かつては藩境を示す木標が川を挟んで立っていた。これが「界木」の地名のいわれだという。木標はのちに石標に替わり、「藩境標柱石」と呼ばれるようになった。（朝日新聞2010/12/4）

53) 市は21日、高い放射線量が確認された半径1メートル付近の地表部分と地表から30センチ下の2カ所の計3カ所から土を採取。30センチ下の土から27万6千ベクレルと19万2千ベクレル、地表の土から15万5300ベクレルを検出したという。市によると、現場は空き地で、十数年前まで市営住宅が立っていた。（朝日新聞2011/10/23）

## 5.2 体験的ノンフィクションのテキスト—紀行文・ルポルタージュ—

「立つ」類の空間的配置動詞は、紀行文・ルポルタージュにスル、シテイル、シテイタの3つの形式が現れる。継続相については、「そびえ立つ」類と共通し、シテイタ形式は「体験的確認」を表し、シテイル形式は「臨場性」のために用いられる。また、これらの継続相は「同時性」のタクシスの意味を実現する。「立つ」類が垂直方向の位置関係を表す用例が1例見られた（例54）。

### (1) シテイタ形式

54) 1月8日、四十九日の法要で実家に行った帰り道、スカイツリーを見上げた。高さ550メートルに迫り、空に向かい凜として立っていた。井上さんには、戦後、苦勞して3人の子どもを育ててくれた母の人生そのものように映った。（朝日新聞2011/1/25）

55) どこまで走っても向日葵畑は途切れなかった。どの向日葵も上背があって、整列した兵隊のように直立していた。太陽に顔を向けているものもあるし、項垂れているものもあるし、監視の目を光らせているものもあった。はあはあはあはあ、ウエ（どうして）ポヌンデ（みるの）？ いつも楽園の前に銃剣を持って立っていた兵隊みたいに！（朝日新聞2003/10/20）

### (2) シテイル形式

56) 篠突く雨にヤマが霞んでいた。熊野市紀和町板屋地区を囲む山々の山腹に目を凝らすと、巨大なコンクリートの柱の群れが居心地悪そうに突っ立っている。紀州鉾山が78年に閉じるまで選鉾場だった。（朝日新聞2009/7/5）

57) 先日、ひさびさに都庁ビルを見に行った。晴れた午後で、直射日光がさんと照りつけていた。まず、正面から見上げてみた。一面の青空を背景に、宇宙船のように直立している。威圧感もあるが、風通しのいい建築とも言えそうだ。（朝日新聞2005/6/7）

なお、体験的なテキストでは、「そびえ立つ」類でも「立つ」類でも、空間的配置動詞の文脈には、



書き手の評価を伴う成分が現れることが多いが、紀行文・ルポルタージュでは、「そびえ立つ」類におけるそのような用例は4割を超えるのに対して、「立つ」類は3割足らずである。

### (3) スル形式

体験的なテキストでは、「立つ」類は、「そびえ立つ」類と同様に、スル形式はシテイル形式と同じく「臨場感」の文体的効果のために使用され、「継起性」のタクシスの意味が成立する。

58) 永昌院からフルーツラインへ下ると、「やまなしし自然と歴史を歩くみち」の看板があり、夕狩沢古戦場跡方面へ歩く。山神やてんぐを祀る八嶽山神社の拝殿を過ぎたところに、夕狩沢古戦場跡の案内板が立つ。そこから北へ入る道を進むと登城口に「熊出没注意」「妙見尊」の看板が見える。崩れかかった厳しい石段を登り続けると、見えてくるのは巨岩を背にした懸造りの展望台だ。さらに巨岩の上に岩場の物見台のような曲輪がある。登り続けると、枯れ葉が残る滑りやすい急斜面が待ち受ける。(朝日新聞2013/3/22)

59) 幾つ目かのトンネルを抜けた途端、息を呑んだ。杉林なのだが、山並みが凄い。急斜面にびっしりと木々が直立する。山は一つではない。次々と谷を挟んで姿を変え、屏風を半ばたたんで立てたように重なる。薄雲と霧が山肌を包み込み、木々を撫でるように、たなびく。(朝日新聞1995/5/15)

ただし、表2に示されているように、「立つ」類の空間的配置動詞は、紀行文・ルポルタージュにおいては、「そびえ立つ」類と比べて、完成相の使用が少ないため、「継起性」の用例が比較的少ない。

## 5.3 フィクションのテキスト—小説の地の文の解説部分—

フィクションのテキストである小説の地の文の解説部分では、「立つ」類の空間的配置動詞は、継続相の使用が基本であるが、完成相スル形式もわずかに出てくる。継続相のシテイル形式もシテイタ形式も恒常的な空間的配置を表す。スル形式も恒常性を表し、シテイル形式と置き換えてもいい。つまり、「そびえ立つ」類と同じである。

### (1) シテイル形式

60) 旧家であって財産家ではあったが、主人も主婦も死んでしまい、娘一人が生き残り、主人の弟の隼二郎という男が、後見人として入り込んでいる。上松の宿から三里あまり、山の方へはいった鷺ノ森という地点に、宏大な屋敷が立っている。——と云うのが茶店の老婆の話した、征矢野という家の輪廓であった。(十二神貝十郎手柄話)

61) まえにもいったとおり、淵はここで袋の底のように行きどまりになっており、われわれの左には、切り立てたような岩壁が突っ立っている。その岩壁の途中に狭い栈道がついているのだが、それは文字どおり爪先がかかるか、かからぬかくらいの広さしかなく、しかも岩壁の表面からは、絶えず砂がこぼれているのだから、そこを渡っていくということは、この上もなく危険な振る舞いといわねばならなかった。(八つ墓村)

## (2) シテイタ形式

62) 奈良宝隆寺から西一町、そこに大きな畑があり、一基の道標が立っていた。今、日は西に沈もうとして道標の影が地に敷いている。そこを二人の若者が鍬でセッセと掘っている。掘っても掘っても何んにも出ない。(大鵬のゆくえ)

63) 「今、上の方と電話で交渉しています」電話のやりとり、主任と王通訳の会話の中に、「同志、同志」と言うのだけが聞き取れる。狐狸庵は、汽車面白からず人民公社尚面白からずというすこぶつきの仏頂面でわきに突っ立っていた。(南蛮阿房第2列車)

## (3) スル形式

64) 左右に低き帆柱を控えて、中に高さ一本の真上には——「白だッ」とウィリアムは口の中で言いながら前歯で唇を噛む。折柄戦の声は夜鴉の城を撼がして、淋しき海の上に響く。城壁の高さは四丈、丸櫓の高さはこれを倍して、所々に壁を突き抜いて立つ。天の柱が落ちてその真中に刺された如く見ゆるは本丸であろう。高さ十九丈壁の厚は三丈四尺、これを四階に分って、最上の一層にのみ窓を穿つ。真上より真下に降る井戸の如き道ありて、所謂ダンジョンは尤も低く尤も暗き所に地獄と壁一重を隔てて設けらる。(幻影の盾)

65) 二階の部屋々々は、時ならず商人衆の出入りがあるからと、望むところの下座敷、おも屋から、土間を長々と板を渡って離れ座敷のような十畳へ導かれたのであった。肱掛窓の外が、すぐ庭で、池がある。白雪の飛ぶ中に、緋鯉の背、真鯉の鱗の紫は美しい。梅も松もあしらったが、大方は櫻楓の大木である。朴の樹の二抱えばかりなのさえずくと立つ。が、いずれも葉を振るって、素裸の山神のごとき装いだったことは言うまでもない。(眉かくしの霊)

## 5.4 フィクションのテキスト—小説の地の文の外的出来事提示部分—

小説の地の文の外的出来事提示部分では、「立つ」類の空間的配置動詞はほとんど継続相で現れるが、わずかに完成相スル形式も1例ある。継続相非過去形シテイル形式は、作中人物の知覚体験性を明示し、シテイタ形式は知覚体験を対象化している。継続相は、「同時性」というタクシスの意味も表す。スル形式は、シテイル形式と同じように作中人物の知覚体験性を明示しているが、タクシスの意味は「継起性」になる。「そびえ立つ」類とまったく同じである。

## (1) シテイル形式

- 66) おせいは、奇怪な、信じられない心持を抱いて、先に立ち、黙ってそこを出た。大通の左右には、絶間なく小路があり、そのまた左右がひしひし、同様な、きらつく、然し人気ない建物で詰められている。行っても行ってもつきない。いやになるほど、同じような建物が、余りきらきら、余り寂しく立っている。(午市)
- 67) 二人は柄沢の家に来た。田谷のおどが寝起きしているのは、納屋の屋根裏だ。五間半に十三間の長い柄沢の家だ。その棟の中に、間口二間半の納屋が馬小屋の隣にある。がたごとと重い納屋の戸をあけると、明かりとりの五分ランプが広い納屋の真ん中に点っていた。ふんと馬糞の臭いがする。ランプの光に、壁にかけた鍬や鋤が鈍く光り、積んだ吠が片隅に小山のように見えた。納屋から屋根裏に、作りつけた梯子が直立している。(ひつじが丘 泥流地帯)

## (2) シテイタ形式

- 68) かれらはしばらくその風景に見とれていた。いつもきたない鈍色の海なのに、きょうは神さまがいたずらをしているのだらうと、子どもたちは思った。製粉所のサイロは、天に向かってによっきり突っ立っていた。子どもたちはふたたび、へいをよじのぼって、製粉所の倉庫の方へ近づいていった。(兎の眼)
- 69) 彼は棒立ちに突立った。それから仔細に辺りを見た。左と右は板壁で、出入口らしいものは一つもなく。ただ正面に古びた家が、戸口を向けて立っていた。「ああ、あの家へ入り込んだな」こう思った彼は走り寄ると、躊躇なく表戸へ手を掛けた。(大捕物仙人壺)

## (3) スル形式

- 70) 而して幾度か止まり幾度か蹠踉いて、子供等の小さい胸を痛ましめた神輿は、突然何か思ひ付いたやうに細い道を東の方に驅つて行つた。山腹の石の鳥居、その下は直ぐ崖で、海に沿ふ家の屋根が見える。そこに青い海面から抜けて白の幟が立つ。而して水平線の彼方には房總の山が眠る。(海郷風物記)

このテキストにおける「そびえ立つ」類との違いといえ、「立つ」類には評価を表す修飾成分を用法が比較的少ないことである。「そびえ立つ」類におけるそのような用例は、外的出来事提示部分の総用例数の6割以上であるが、「立つ」類は4割程度である。5.2節の体験的なノンフィクションの紀行文・ルポルタージュにもこのような現象があった。

## 6 結論

以上の考察によると、「そびえ立つ」類と「立つ」類の空間的配置動詞のアスペクト・テンス形

式の意味・機能は共通しており、以下のようにテキストタイプと関連している。

表3 垂直方向の空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の意味・機能とテキストタイプ

	完 成 相	継 続 相	
	スル	シテイル	シテイタ
①地誌論述文	恒常性 (存在動詞化)	恒常性	過去の長期的存在
②紀行文・ルポルタージュ	臨場性 (継起性)	臨場性 (同時性)	体験的確認 (同時性)
③小説の地の文の解説部分	恒常性 (存在動詞化)	恒常性	恒常性
④小説の地の文の外的出来事 提示部分	知覚体験性 (継起性)	知覚体験性 (同時性)	知覚体験の対象化 (同時性)

つまり、垂直方向の位置関係を表す空間的配置動詞は、非アクチュアルなテキスト（地誌論述文、解説部分）に現れて恒常性を表すのが基本的であるが、アクチュアルなテキスト（紀行文・ルポルタージュ、外的出来事提示部分）では、ムード性、文体的効果、視点などの書き手や登場人物の捉え方や、他の出来事との時間関係を表すタクシスの機能が浮上ってきて、主観的な側面が前面化するのである。

上記のような本稿の考察結果は、前稿における「そびえる」に対する考察結果と一致すると考えてよい。前稿では、フィクションのテキスト（③④）には、完成相が現れなかったが、今回の調査ではわずかに現れた。「そびえる」に比して「そびえ立つ」「そそり立つ」「屹立する」「切り立つ」の方が高さや角度が強調されていて、より主観的な用法で使われやすいということはあるかもしれないが、今のところ、「そびえる」がフィクションのテキストに現れない必然性が見当たらないので、表3をもって、垂直方向の位置関係を表す空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式の一般的な意味と機能と考える。

しかし、このような特徴を共有しながら、動詞グループによって使用の傾向に違いがあることも見逃せない。「そびえる」や「そびえ立つ」類の空間的配置動詞には、「立つ」類の空間的配置動詞と比べて、以下のような特徴が認められる。

- (1) 地誌論述文において、垂直方向の位置関係を表す用法がある。
- (2) 体験的なテキストである紀行文・ルポルタージュにおける完成相の出現率がより高く、「継起性」のタクシスの意味を表す用例の出現率が高い。
- (3) アクチュアルなテキスト（紀行文・ルポルタージュ、外的出来事提示部分）において、評価性を表す成分との共起がより多い。

本稿で取り上げた「そびえ立つ」「そそり立つ」「屹立する」「切り立つ」や「直立する」「突っ立つ」の語彙的な意味は、「立つ+*a*」と分析できよう。「立つ」以外の「立つ」類の動詞の「+*a*」は、「まっすぐ」というもともと「立つ」にある方向性の意味を強調しているだけで、方向性以外の空間的配置に関する意味をもっていない。一方、「そびえ立つ」類の動詞では、「+*a*」として、高さや大きさといった量的な特徴を含んでいる。そこに、動いていないものを動いているかのように捉える主観的な用法を発達させる余地があるのである。ただし、こうした動詞グループの間の違いは相対的な問題であって、空間的配置動詞の意味には、本質的に主観的な側面があるといえよう。それは、対象の空間的配置は、常に人間の経験を基盤として成立するからである。「立つ+*a*」という意味をもつ動詞には他に「並び立つ」「林立する」「乱立する」などもあり、それらに対する考察を今後の課題としたい。

#### 参考文献

- 影山太郎（2012）「属性叙述の文法的意義」『属性叙述の世界』くろしお出版
- 金田一春彦（1950）「国語動詞の一分類」『言語研究』15
- 工藤真由美（1993）「小説の地の文のテンポラリティー」『ことばの科学6』むぎ書房
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 呉揚（2015）「空間的配置動詞のアスペクト・テンス形式とテキスト—「そびえる」の場合—」『日本語の研究』11-1
- 須田義治（2009）「現代日本語における状態・特性・関係を表す動詞の連体形」『国語と国文学』86-11

付記 本稿は、平成29年度科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号：16J30004）による研究成果の一部である。